

同経会報

No.81 2018.4 - 春号 -

新島襄先生の言葉

海外インターンシップについて


卒業生のつどい 東京

卒業生からの便り

同経会賞受賞者からの便り

特別インタビュー 同経会顧問 秋山哲氏

現役学生が語る「わがゼミ」



教育の目的は、智徳併行にして人物養成の一点に止まれり。
人才養成にあらず、人物養成の意なり。

出典…『新島襄の手紙』岩波文庫 247頁

些少の情実のため我が子孫千百年の自由を売却すべからず。

出典…同志社編『新島襄の手紙』岩波文庫 224頁



同経会会長からのご挨拶

同経会会長 服部盛隆



同経会の皆さん、お変わりございませんか。最近の内外の動きに、ふと高校時代の国語の時間を思い出しています。授業の内容は「正・反・合」という言葉とともに、意見と反対意見の対立や矛盾を通して、より高い進んだ段階に至るというものであったと思います。哲学としての弁証法を論じる能力を持ち合わせ

ターのシンポジウムを拝聴させていただきました。と思っています。

もう一つのお知らせです。

同経会名簿を作成したいと思っています。

もちろんプライバシーなどに配慮するのは当然ですが、電子媒体を活用し、出来れば5万人を超える経済学部卒業生の皆様に幅広く有効に使っていただけるものになりたいと思っています。

例えば、同業種や異業種の集いとか、年齢層別の集いとか、お互いの活動に役立つものを目指せたらと思います。

目下のところ、同経会活動に積極的に参加していただいている会員は3、4千人くらいですが、出来るだけ多くの皆様に太い絆で関わっていただきたいと願っています。

そして大切なお話です。

2025年に母校同志社は創立150周年を迎えます。

大学では「同志社大学ビジョン2025」を策定し実現に努めておられます。ビジョンの推進に、同経会員お一人お一人のご協力を切望いたします。

改めて、皆さまのご健勝とご活躍を心から祈りいたします。



経済学部長からのご挨拶

経済学部長 新関三希代



経済学部長に就任して、はや2年が経とうとしております。学部長として同志社大学経済学部のために少しでもお役に立つことができたのか、伝統ある学部の功績を守りつつ新しい風を吹かせることができたのか、自問する日々が続いておりますが、主任の先生方や事務室の皆様、そして同経会の皆様をはじめ多くの方に支えられながらここまでくることができました。

一つ自信を持って言えることは、学部長を経

せておりませんし、対立や分断の対処に「コミュニケーション」が万能とも思えませんが、対話の範囲がかなり狭められた現状は、極めて残念であり不幸であります。

今「反」の振り幅は行きつくところまで行っているように思えますが、混乱が早期に収束する、すなわち次の高い次元の「合」が生じるためには、「反」がもっと極限近くまで振り幅を強く大きくするとか、「正」の側が反対意見や矛盾を執拗に言い続ける、そういったことが必要なのでしょうか。

話は変わりますが、2017年春号の「挨拶文」で以下のことを申し上げました。

「人工知能が活用される時代に、良心を盛り込んだ人の幸せを願う複合的な研究が、国際主義を掲げる同志社から世界に発信されれば素晴らしいと夢は広がります」と。

実は、その時既に同志社大学良心学研究センターが学部の垣根を越えて2015年に作られていました。宗教学、国際政治、社会福祉、教育史、エコロジー経済、国際ビジネス、心理学、国際生命論理、科学論理など人文社会系とカリエスといった既存の学問領域を超えたスケールです。

私の情報収集力の範囲の狭さを改めて認識し、今年はずいぶん機会を作って良心学研究セン

験してますます同志社大経済学部（在学生・卒業生や教員・職員含）が好きになったということです。

残り少ない学部長としての任期を学部教育・研究環境のさらなる発展のために努力して参りたいと思っております。同経会会員の皆様、ますますのご支援をよろしくお願い申し上げます。

さて、学部長になってから人前で挨拶をさせていただく機会が多く、何を話すべきか頭を抱えることが多かったのですが、経済学部主催の講演会等で多くの尊敬すべき方々と出会うことができました。また、普段は決して聞くことができない貴重な講演を数多く聴くことができたのは、学部長の特権でした。

昨年1月には、高名な神学者・哲学者・環境学者でいらつしやるジョン・カブ教授をお招きし、同志社チャペルにて国際シンポジウムを開催することができました。92歳のご高齢にも関わらず、遠く米国はカリフォルニア州からお越しいただきました。そして、環境問題を解決して生態系と共存可能で持続可能な文明を構築するために良心をどう発揮してゆくべきか、といった内容の講演を力強く行っていたいただきました。

また、9月には雨宮健・スタンフォード大学名誉教授をお招きし、クラーク記念館にて、「古

代ギリシャと古代中国の経済と経済思想史」というタイトルでご講演をいただきました。

まさか、私が大学院時代にダブルとして愛読していたテキストの著者、世界トップ・クラスの経済学者・計量経済学者の雨宮先生に同志社大学でお会いし、お話ができるなんて夢にも思っておりませんでした。

雨宮先生の奥様の御曾祖父様でいらつしやる中島力造先生が、同志社英学校の第一回の入学生であったというご縁でした。

お二人の先生方が口をそろえておっしゃっていただいたことは、本校の建物や設備といった環境の良さだけではなく、歓迎してくれる同志社人に感銘を受けたということでした。

このような講演会を開催できるのも本学の教員が国際的に活躍し、幅広い人脈を有しているということ、資金の工面からセッティングまで陰ながら支えてくれる有能な事務スタッフがいるということ、そして同経会からの支援があったことです。本当に感謝しております。

これからも世界に誇れる学部を目指して、教育・研究に勤しんでいきたいと思っております。末筆ではございますが、同経会会員の皆様のご健康と各分野でのさらなるご活躍を祈念申し上げます。

新島襄先生の言葉	2
同経会会長からのご挨拶	4
経済学部長からのご挨拶	5
海外インターンシップについて	8
卒業生のつどい 東京	18
卒業生からの便り	19
同経会賞受賞者からの便り	22
特別インタビュー	25
同経会顧問 秋山哲氏	25
退任の先生のご紹介	30
現役学生が語るわがゼミ	32
同経会役員名簿	43

編集後記	6
訃報	24

はやいもので、同経会報が一新されて3号目となりました。毎回、あらたな気づきがあります。

たとえば、巻頭見開きページ「新島襄先生の言葉」の右側に「人物養成」という言葉があります。私はこれまで「人格形成」という言葉をよく使ってきましたが、ある大先輩によれば、新島先生は「人物養成」のほうをよく使用されていたとのこと。大いに反省しました。

もちろん、人格形成という言葉でも内容に間違いはないのですが、同志社人としてはできるだけ新島先生の思いをくみとった言葉を使っていくべきであると、強く気づかされた一事でした。

ほかにもあります。じつは新島先生はこれだけの大人物でありながら、著書が出版されていないことでも有名です。

これは一体どうしたことかと自分なりに考えていますと、気がつくことがありました。

それは言葉の怖さをご存じだったのではないか、ということです。言葉は便利な道具です。

遠く離れた相手に対しても、手紙を飛ばすことができる。

近年では、IT技術の進歩により、世界の裏側に対してもものの1秒もかからず、メールが届くようになりました。さらにライン（LINE）のようなものを使用すると、相手も瞬時に読むことができます。

ですが、これらコミュニケーション技術が発達したからといって、世の中が幸せになったかというところではない気がします。中高生がラインを多用することにより、LINEイジメと呼ばれる仲間外れの助長現象などが見られるようになってきました。LINEをはじめとした各種SNSはあまりに文章が簡単に書き込めてしまうから、いろいろな誤解が生じてしまうのでしょうか。

今回の同経会報のなかにもたくさん言葉が使われています。言葉を本にすると、多くの人に必要な情報を伝えることができます。印刷された文字は、ネットのように修正は不可能です。これからも細心の注意を払って編集作業をすすめていけたらと思っています。

(編集委員長)

12月2日・3日に東京で行われた日本政策学生会議（ISFJ）主催の2017波ゼミの論文が、環境防災エネルギー(2)分科会で「優秀発表賞」を受賞しました。

受賞論文は《環境防災エネルギー(2)分科会 優秀発表賞》「化粧品品の環境問題解決と経済規模の拡大」です。執筆者は、三原佳音さん、井手坂優花さん、小西美香さん、林美穂子さんです。分析や企業へのヒアリング不足など学術論文としての力不足は否めないものの、一般消費者に着目されにくい化粧品から発生する環境問題の存在とその解決にむけた研究に着手した点や、過去になかったアンケート・研究等を行い政策提言を行った点が評価されました。受賞に対し、心より御祝い申し上げます。



政策フォーラムにて
優秀発表賞を受賞！
「伊多波良雄ゼミ」



海外インターンシップについて

2017年度の海外インターンシップ事業は、ダイキン工業株式会社様、株式会社石田大成社様、株式会社マイツ様、株式会社鶴見製作所様、株式会社ノーザンライツ様、みずほ銀行デュッセルドルフ支店様、科瑪化粧品(蘇州)有限公司様、シークス株式会社様の協力を得て実施しました。心より感謝申し上げます。研修生として参加したのは、奥田佳緒莉さん、小野内大祐さん、河合歩美さん、小村紗也さん、榎木風夏さん、須東優花さん、豊崎有美子さん、林万理恵さん、森岡裕登さんの9名です。経済学部の方、事務室の皆様をはじめご協力いただいたすべての方々に厚く御礼申し上げます。

海外インターンシップを通して見たキャリア像
—ダイキン工業株式会社にて—
奥田佳緒莉

今夏2017年8月14日より、ダイキン工業株式会社様のマレーシア販売拠点である DMSS 社 (Daikin Malaysia Sales & Service Sdn.Bhd.) 様でのインターンシップに参加させ

てきました。地球温暖化が進行する中で、私たちと同じ豊かさ・快適さを新興国の全ての人々が獲得できるような製品作りに携わりたいと強く感じました。

また、現地の顧客の方が日本ブランドを信用してくださり、従業員の方も日本の製品に誇りをもって業務を行っている姿を見ました。加えて製品による快適さだけではなく環境に配慮した生産・物流を実行し、新技術・社会的責任・信頼を同時に追求する日本の製造業で、世界に良い影響を与えることができるという働き方に魅了されました。

参加される皆さんには、2週間という限られた期間をより有意義なものにするために、自分がなぜ参加し何を学びたいかという目的設定をし、そのために必要な能力を磨いておくの良いと思います。

このインターンシップは圧倒的な実践型プログラムで、より高い英語力やコミュニケーション能力等は、現地で多くの情報を獲得できるツールとなります。強い意志を持って是非チャレンジをしてみてください。

最後に、大変貴重な機会を与えてくださった、ダイキン工業株式会社・DMSS・DAMA社の皆様、同経会・経済学部の皆様、その他関係者の皆様に心より感謝申し上げます。日本を代表し世界の第一線で働ける人材となれるよう、今

ていただきました。

参加目的は、①異文化の経営体制・事業戦略・働き方を知ること、②従業員の方のこだわりに触れ、日本の製造業の社会活躍を見ることでした。そしてインターンシップに参加する決意として、できるだけ多くの従業員の方と交流し、自らのキャリア像を明確化して帰ってくることを目標としていました。

現地での業務内容は、様々な部署を2週間体験することで、全体の企業活動を学べるものでした。HR部門では採用・社員評価・社員教育・企業文化の形成・福利厚生等の学習。マーケティング部門では、マーケティング戦略・市場調査の学習とショートビデオ作成への同行。プロショップ部門では、基本業務の学習とショールームへの同行。プレセールス部門では、不動産との打ち合わせとBioB営業への同行。営業部門では、自ら英語での営業。生産・物流部門では、ダイキン工業株式会社様のマレーシア生産拠点である DAMA 社 (Daikin Malaysia Sdn. Bhd.) 様並びにサプライヤー様の工場見学といった内容でした。

この一連の業務を通して自らのキャリア像

後も大学生活に精進してまいります。

アメリカという地での経験
—株式会社石田大成社にて—
小野内大祐



私は8月20日から9月3日まで、株式会社石田大成社・ダラス支店にて二週間のインターンシップをさせていただきました。昨年まではロサンゼルスでしたが、今年から新たな地で

を、「新興国を豊かにするために海外の第一線で働くこと」、また「モノづくりの限界」と叫ばれる中【日本の技術力でもう一度世界に大きな影響を与えること】と定義することができました。

日本でエアコンはどの家庭にも存在し生活を快適にしてくれるものですが、現地では所得の関係で質の悪い製品や製品自体を持たない状況でした。特に私が訪問したマレーシアのクアラルンプール付近では、ビル街の大都市と平屋に住む貧困層が混在しており、貧富の差を肌で感



るテキサス州ダラス北部のプレイノという地で研修を行いました。

今回私がインターンシップに参加した一番の目的は、海外で働くということをより明確にすることができると思ったからです。私は将来海外で働きたいという漠然とした憧れを持っていました。しかし、今までそのような経験をさせていただけの機会がありませんでした。そこで、今回の機会を活かし実際に海外で働くことの経験を通して、将来海外で働くために必要なスキルを知ることができると考えました。また、石田大成社は自動車産業の本場であるアメリカで日本の主要産業がどのように活躍なさっているかを学べる良い機会だと思い参加することにしました。

2週間の中で、ローカライゼーション・TEMA・コミュニケーショングループ・会計・人事など、様々な仕事内容を紹介していただきました。説明の中では専門用語が多く、なかなか理解をすることが難しい部分もありました。仕事内容の紹介だけではなく、毎朝のテレビ会議への参加や、実際に顧客であるトヨタ自動車本社を訪れ、見学等をさせていただく機会もありました。

最終日には、取扱説明書に関するアプリの概要についてプレゼンテーションを英語で行いました。2週間で学んだことを活かした良い発表



ができたと思います。これらの経験を通して、海外で働くことについて、日本の企業がアメリカなどのように活躍をさせているのかについてなど、様々なことを学ぶことができたとともに今後の課題も見つけることができました。

今回のインターンシップを通じて私が一番実感したことは、自分自身が無知であるということとです。仕事の説明を受けているときや、現地の方・駐在している方々とのコミュニケーションを通じて、仕事に関することや今まで経験なさってきたことなどをうかがうことができませんでした。そして、自分のまだ知らないことがたくさんあることを改めて実感しました。今までの「学校」という枠の中では知ることのできない「社会」についてのお話をたくさん伺うことができ、非常に良い経験ができたと感じています。残りの学生生活を充実させるためにも、今後も積極的に様々なことに挑戦し、多くのことを学んでいかなければならないと思いました。

最後になりましたが、このような大変貴重な経験の機会を与えてくださった、同経会の皆様、同志社大学経済学部の皆様にご心より感謝申し上げます。また、2週間快く受け入れてくださった石田大成社テキサス支店の皆様にはとても感謝しております。本当にありがとうございます。

また、最終日に行われたマナー講座を通して、ビジネスで基本とされていることを学生のうちに身につけようと思いました。

3つ目は、勉強量の足りなさを痛感したことです。語学力はもちろん、海外についての知識が足りていないと身をもって感じました。

今回のインターンシップを通して、日常生活では決して経験することができない、貴重な時間を過ごすことができました。インターンシップ前よりも、海外で仕事をするに對するイメージが、濃くなりました。同時に、今の自分には足りていないものが沢山あること、また、力をつけていくための努力も、目標に見合っていないことに気づきました。まずは、具体的な目標を立て、今後の学生生活の中で一つ一つ達成していきます。

先輩の皆さん、特に、海外で働きたい方、あるいは外国語を使う仕事に興味がある方は、ぜひ海外インターンシップに挑戦することをお勧めします。2年次生の夏に、このような経験をしているのとは違うのでは、今後の学生生活の質も大きく異なると思います。チャンスを活用するかどうかは、自分次第です。最後にになりましたが、本インターンシップに参加する機会を与えてくださった株式会社マイツの皆様、同経会の皆様、関係者の皆様には、心より感謝申し上げます。ありがとうございます。

現場に行くことの大切さ

株式会社マイツにて



河合歩美



8月21日から9月1日までの2週間、上海邁伊茲諮詢有限公司でインターンシップをさせていただきました。上海マイツは、会計税務支援や法務支援をはじめとする、様々なサービスを行っている総合コンサルティング会社です。

海外インターンシップに参加した目的は3つあります。1つ目は、経済が発展している中国の大都市、上海をこの目で見たかったから。2つ目は、現地の中国語に触れたかったから。3つ目は、海外で求められる力は何か知りたかったからです。

グローバルに働くとは一言語の壁を越えた先へ

株式会社鶴見製作所にて



小村紗也

8月21日から31日の間、TSURUMISINGA POREPPE LTD. でインターンシップに参加させていただきました。

鶴見製作所は水中ポンプを中心に、私たちの生活を支えている企業の一つです。ポンプの活躍の場は、工場現場や下水処理場といったインフラからテーパークの噴水に至るまで広がっています。ツルミシンガポールは、東南アジアにおけるマーケティングの重要な拠点であり、シンガポール国内だけでなく周辺国なども担当しています。

今回海外インターンシップを志望した理由は2つあります。

1つ目は、海外で働くことを通じて視野を広げ、将来自分がいかに働きたいかについて深く考えたいと思ったからです。2つ目は、生活基盤を支えるポンプという製品がグローバルマーケットにおいてどのように展開されているのかを肌で感じたかったからです。

現地では、ポンプの仕組みなどを学んだ後に、ディーラー訪問や営業に同行させていただきました。営業先は、国が管理する自然公園からリゾート施設、地下鉄工事を担っているゼネコン、

たからです。

インターンシップでは、中国語資料の日本語訳をしました。大学に入学して1年半の間、中国語を勉強してきたのにも関わらず、3枚の資料を訳し終えるのに1日半かかりました。社内は、日本語と中国語が同時に聞こえるという今まで居たことのない環境でした。語学力だけでなく、専門的な知識も必要とされるビジネスを見ることができました。

また、就職活動にも生かすことができるレクチャーを行っていただきました。社会保険や企業のホームページの見方について、実際に上海マイツで行われた資料をもとに教えていただきました。その他にも、店の売上を伸ばす方法を考えたり、オープンウィンドウと呼ばれる目標設定をしたりしました。

成果は大きく3つあります。一つ目は、海外の文化に触れたことです。日本では当たり前と感じていることが、海外では全く異なっている、ということが多々ありました。驚きもありましたが、グローバル化が進む現代において、海外の生活習慣を知ることが、かなり重要だと思いました。

二つ目は、ビジネスの現場における緊張感を感じたことです。初日に約200人の前で、中国語で挨拶をしました。大勢の前で話することに慣れていないこともあり、大変緊張しまし



養魚場などシンガポール中の多種多様な現場でした。

例えば、地下鉄工事現場では、実際に地下2階に相当する現場まで降り、将来電車が走っていくであろう線路を歩いてポンプの設置場所を確認しながら見学させていただきました。特にシンガポール政府は蚊の発生を防止するため、水たまりに非常に注意を払っており、水を吸い取るためのツルミポンプが至る所に配置されていました。また自然公園では、アクアポニックスという仕組みにツルミポンプが使われていま



した。アクアポニックスというのは、魚を育てている水槽の水をポンプで一部くみ上げ、植物を育てるための水として使用し、さらにその水を再び水槽に戻すというように、水を再利用しながら循環させており、水産養殖と水栽培を組み合わせた仕組みとなっています。この仕組みは自然公園に限らずビルの屋上などでも取り入れられており、ツルミポンプはそうした多くの現場で導入されていました。

本インターシップが初めての海外ということもあり、日々の業務において英語がうまく話せないことへの葛藤や悔しさをたくさん感じました。しかし、多くの営業に同行させていただく中で、言語の壁を越えた先にある海外でのマネジメントの面白さなどを垣間見ることができ、私も早くそこに到達したい、もっと言語の先を感じたいという気持ちで、一生懸命に全力で2週間を駆け抜けていきました。帰国後、改めて海外インターシップでの2週間を振り返っても、本当に濃密な時間だったと感じます。

日本でもシンガポールでも多くの方々に支えられ一生忘れることのできない経験を得ることができました。このような貴重な機会を設けてくださった鶴見製作所の皆様、同経会の皆様、同志社大学経済学部の皆様、関係者の皆様に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございます。

ゲームをしたり、習字をしたり、私は今大学でよさこいをしているので、よさこいを少しレクチャーしたり、自由に色々なことをさせていたできました。

他にも、インドネシア人向けの日本語を学ぶための動画を撮影してYouTubeにアップしたり、日本人のバンドン留学について調べてまとめたりといったことも行いました。

インドネシアに行くって初めのほうはなかなか馴染むことができず、自分から能動的に動くことができませんでした。同社代表として行かせてもらっているのというプレッシャーもあり、毎晩日記をつけながら自己嫌悪に陥っていましたが、そんな私が少し変わるきっかけになったことがあります。

それは月に一度NEDCで行われているイベントです。八月のイベントは私が企画させていただくことになり、そこで私は、私だからできることとして、日本の伝統文化であるよさこいのイベントをすることにしました。NIECの先生たちと一緒に企画を練って、先ほど紹介させていただいた学校訪問の際に自分で宣伝を行っていきました。そして迎えた当日は、予想よりたくさんの方がイベントに参加してくださいました。イベントも盛り上がり、みんなが楽しかったと言ってくれました。そこでやっと、NIECに少しでも貢献できたかもしれないとい

インドネシアと日本を繋ぐ
株式会社ノーザンライツにて
梶木風夏



私は今回株式会社ノーザンライツ様にお世話になったのですが、ノーザンライツ様が行われている事業の一つである、インドネシアでの人材育成のお仕事を体験させて頂きました。

オフィスはインドネシアのバンドンにあり、バンドンは経済も発展していてたくさん学校があり、日本人の私でも過ごしやすく、しかしインドネシアらしさもちゃんと感じられるととてもいい場所でした。

う達成感を得ることができ、毎日手探りでしていたことが間違っていなかったんだと思えて本当に嬉しかったです。

このイベントを機に少し自分に自信を持てるようになり、自分から積極的にNEDCの先生たちに話しかけたり、NIECに通っている生徒たちともたくさん交流することができるようになり、そして、私は人前に立つことが苦手だったので、前ほど緊張することはなくなり、その後のプレゼン活動をスムーズに行えるようになりました。

私は実際インドネシアに行き、インドネシアの可能性を肌で感じました。インドネシアは人口も多く、好奇心旺盛で、勉強熱心で、日本のことが大好きな若者が多く、日本で就職したいと思っている人も多かったです。だからこそ、インドネシアでの人材育成は、日本に興味を持つているインドネシア人にとっても、若者の数が減りつつあり、若者を必要としている日本にとっても必要なことで、とても素晴らしいことだと感じました。

私はインドネシアで本当に充実した日々を送ることができ、毎日一日たりとも同じことをする日はなく、私の人生の中で最も刺激的で濃い二週間でした。貴重な経験をさせていただき感謝しています。関わってくださったみなさま、本当にありがとうございました。

オフィスの名前はNIECといって、NIECは主に、インドネシアに住む人々のための日本語塾、日本への留学斡旋、優秀なインドネシア人を日本の企業に紹介する、などといったことを行なっています。

このインターシップで与えていただいた私の課題は、NIECをたくさんの方に知ってもらう、興味を持ってもらうことでした。そしてそれに向けて主に私が行ったことは、インドネシアの中学校、高校、大学への訪問です。ここでは現地の学生との交流や、自分で作成したパワーポイントの発表をさせていただきました。

パワーポイントは、日本の文化や学生生活など現地の学生に興味を持ってもらえるような内容にしたり、学校に合わせた、例えば中学校であれば中学生に合わせた内容にしました。そして、現地の学生と交流していく中で、インドネシアで流行っているものの情報を得て、毎回の発表ごとに改良を重ね、自分なりに工夫して発表していきました。

現地の学生はみんな一生懸命に聞いてくれて、日本の学生であれば考えられないくらい純粋で、スレてなくて、とても楽しく発表しやすい環境でした。毎回各学校が、私のために約2時間、時間をとってくださったので、パワーポイントの発表だけではなく、日本語を使った

グローバルに働くということ
ダイキン工業株式会社にて
須東優花



今夏、私はマレーシアのセララン州にあるダイキンマレーシアサービス&セールス(以下DNSS)において2週間の海外インターシップに参加させていただきました。このインターシップに参加を希望した理由は主に2つあります。

理由の一つ目は海外で「働く」という経験をしてみたかったからです。短期ではありますが1か月の語学留学をした際に、生活習慣や文化の違いなど、実際に現地でしか感じられないこ



とがたくさんありました。そのため、今は漠然として海外で働くことに対するイメージを明確にするには、実際に海外でインターンシップをするしかないと思います、応募しました。

二つ目は、世界、特に発展めざましい東南アジア、における日本企業のあり方を間近で体感したかったからです。私がインターンシップに参加させていただいたダイキン工業株式会社様は、日本はもちろんのこと、世界中に生産・販売拠点をお持ちで、空調機器において世界でもトップの売上高を誇るなど、非常にグローバルに活躍されています。今や私たちの生活には欠かせないのでできない空調機器の販売を通して、日本企業の海外における現状と展望を見たいと考えました。

DMSSでは、ほぼ日替わりで色々な部署に配属していただきました。各部署の業務を理解するだけではなく、実際に業務をやらせていただいたり、現地の工場を見学させていただいたり、様々な経験をさせていただきました。特にセールス部門では、実際に営業先でプロポザルの一部を任せていただき、社会人の方の前でビジネス的なプレゼンテーションをさせていただいたのは、私にとって非常に貴重な経験でした。

また、現地で働く日本人駐在員の方にお話を聞くことができたことで、自分の将来のグロ

バルなキャリアを具現化することができたように感じます。このインターンを通して、様々な自分の弱み・強みを認識できましたが、私から特に伸ばすべき点は、「言語力」と「自信」であると感じました。それらをこれからの学生生活の中でどのように伸ばしていくか、どのように将来のキャリアにつなげていくかを考える良い機会になりました。

参加を検討されている後輩の皆様には、ぜひ勇気をもって応募していただきたく思います。私自身も言語への不安や、海外での生活への不安から非常に応募を迷いましたが、応募してよかったと自信を持って言えます。実際言語の壁にぶつかったこともありましたが、そのおかげでこれからの課題も見えてきましたし、それを乗り越えてこそ得られるものがあると思います。

最後になりましたが、このような貴重な機会を設けてくださったダイキン工業株式会社およびDMSSの皆様、同経会の皆様、同志社大学経済学部の皆様、すべての関係者の皆様に心から感謝申し上げます。2週間は本当にあつという間でしたが、非常に濃い2週間でした。今回学んだことを糧に、今後の学生生活がさらに有意義なものになるよう努力してまいります。ありがとうございました。

り、企業訪問では英語でインタビュを行ったこと、自分が銀行員であればどのような金融サービスを提供するのか、という実践的な経験をさせて頂きました。

このインターンシップを通して、当初の志望理由であった金融業務、国際業務の体験に加え、社会で必要な考え方の一端を学ぶことができたように思います。それは、「何事にも正解はない」ということです。当たり前ですが、社会でも正解はありませんが、社会では何が正解か誰にも分からないことがあり、それを正解へ近づける努力が大切であると感じました。特にプレゼンテーション準備の際に、内容がまとまらず行き詰まっていたところ「自分なりの提案をして欲しい」というアドバイスを頂き、自ら考えて答えを探求することが重要であると実感しました。今後この考え方を忘れずに過ごしていきたいと思

最後に、大変貴重な機会をくださった同経会の皆様や経済学部事務室の皆様、およびその他関係者の方々、そして何より、温かくインターンシップを受け入れてくださったみずほ銀行デュッセルドルフ支店の皆様に、心より御礼申し上げます。

この経験を糧に、自らの理想に近づき社会に求められる人材へと成長できるよう、日々の勉学に励んでいきたいと思



講義形態はマンツーマンであったため、どんな質問にも快く説明してくださり、理解を深めることができました。そして、1日の終わりにはその日の内容をまとめた日誌を記入しました。初めて学ぶ内容ばかりだったため、アウトプットがおぼつかない時もありましたが、行員の方が何度も添削してくださり、2週間が終了した頃には以前よりも金融知識がついた実感がありました。

二つ目は、企業分析です。実際にドイツの企業へ訪問をさせて頂いた上で、どのような金融サービスを提供できるのかを調査し、最終日にプレゼンテーションを行いました。銀行内の情報を参照させて頂いて財務状況を分析した

インターンシップから見えた世界
株式会社みずほ銀行にて
豊崎有美子

2017年8月28日から2週間、みずほ銀行デュッセルドルフ支店のインターンシップに参加させて頂きました。

このインターンシップの参加を志望した理由は主に二点あります。

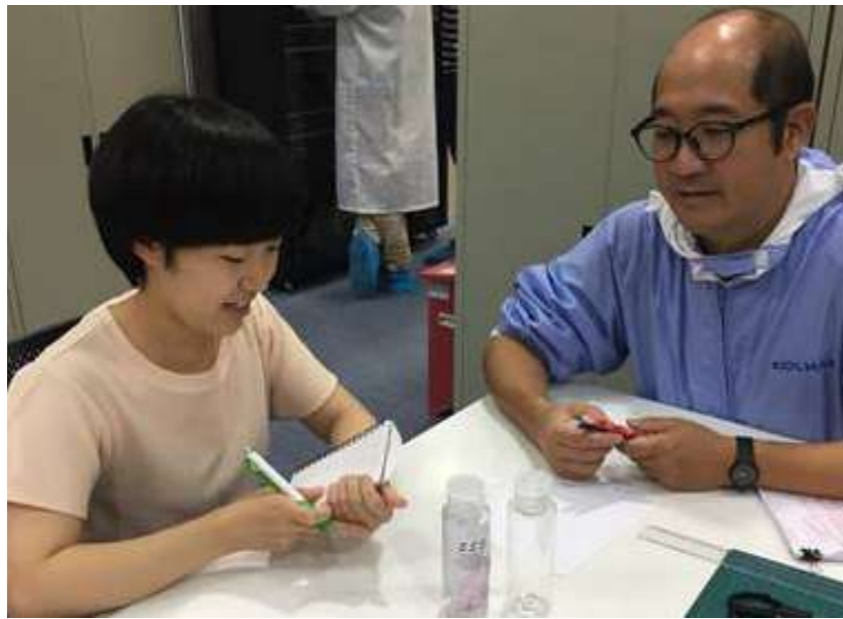
一点目は、金融業界に興味があったからです。現在ゼミ活動でファイナンスや企業活動を勉強しており、机上で勉強していることを、実際に経験させて頂ける良い機会であると感じました。

二点目は国際的に活躍できる人材になりたいからです。二年次生の時にセメスター留学に参加した経験から、海外で働くことに憧れを抱くようになりました。

インターンの内容は大きく2つありました。

まず一つ目は、金融業務理解のための講義の受講とその内容をまとめた日誌の作成です。お客様と直接関わる営業課およびCredit & Customer Relations 課、また、オフィス内でのような課を支えるレーティング課や人事経理課等、支店の全ての課からレクチャーをして頂きました。日本人とドイツ人から半分ずつ受講し、ドイツ人の際には全て英語での講義でした。

海外インターンシップで学んだこと
科瑪化粧品(蘇州)有限公司にて
林万理恵



私は、科瑪化粧品(蘇州)有限公司でのインターンシップに参加させていただきました。

今回、私が参加を希望するに至った理由は、「日本品質で中国生産」を実現させている商品化のプロセスを学びたいと思ったからです。将来、



日本と繋がりをもちながら海外で働きたいと思っており、日本品質で提供するための、日本との連結方法に興味を持ちました。また、その中で、海外で働くイメージを掴みたいとも思っていました。

インターンシップ内容は、まずは、実際に工場見学をしながら各部門の方に業務の説明をしていただき、化粧品完成までの工程を学びました。また、会議にも出席したり、業務の疑似体験として、化粧品の企画・見積を作成したり、営業部の方をお客様としてその化粧品の提案をしました。

そして、インターンシップでは3つのことについて大きな学びがありました。1つ目は「どのように日本品質を実現しているのか」です。これは、2つのことから実現していると感じました。1つは、事前に日本で調べていた通り、日本と同じ工程・原料・機械などで生産すること。もう1つは、異なるベースの人が重なりあっていること。短期・長期の日本人駐在員、中国で採用になった日本人、日本語が話せる中国人などいろいろな人が一緒に働いていました。そして、あらゆる立場から日本人が指導したり、中国人とコミュニケーションをとったり、文化も言語も違う人々が働きやすい環境になっていると思えました。つまり、工程だけではない異なるベースの人が重なり合っていることも日本



の、実際に日本人の方々が、どのような環境で、どのような仕事をしておられるのかはイメージが湧きにくいものでした。このインターンシップを通して、実際に海外で働く方々と同じ空間で就業体験をさせていただくことで、それらが明確になるのではないかと考え、参加しました。

1週目は、シンガポールで貿易業務をさせていただきました。各部門のローカルスタッフの方から、部品の発注や、製品の在庫管理、輸出

品質を中国で実現する上で重要な点だと思いました。

2つ目は文化の違いに関することで、「文化の違い」、そして、「文化の違いを感じる中でどのように働くのか」です。2週間で、あらゆる場面で文化の違いがあることを知ることができましたが、ある時は中国の考え方に合わせ、ある時は日本の考え方に合わせてもらうこと、予定外のことにも対処できることなど、柔軟に考えて行動していかないといけないということを学びました。

3つ目は、「海外で働くことの難しさ」です。今回は日本の方々に支えていただいたり、日本語が話すことができる中国の方がたくさんいたため、中国語が話せないのが原因で何もできないということはありませんでした。しかし、実際に働いている方が苦労しているというところをお聞きしたり、実際に中国に来て、こちらで働いている方を見てみると簡単でないことは分かりました。海外で働くうえで、文化・考え方の問題や言語の問題に対処しなければなりません。願望だけではなく、海外で働きたいならそれなりに自分で準備をしておかないといけないと感じました。

振り返ると、どの学びもこのインターンシップに参加したからこそ分かったことであり、この2週間はとても濃いものでした。また、お仕入業務の仕組みを教わりました。また、部品供給企業の工場や、貨物取扱企業の倉庫の見学もさせていただき、部材調達から出荷までのプロセスを学ぶことができました。

2週目は、インドネシアの Batam 島にある工場で製造業務・生産管理業務について学びました。工場では生産性向上、そして高い品質を保つための徹底された管理を見ることができました。また、実際に製品の組立や、はんだ付けなどの製造業務も体験させていただきました。モノづくりの現場を肌で感じることができました。

また、仕事に対して大きな責任と強い熱意を持って活躍しておられる日本人駐在員の方々の姿が印象的でした。海外で働くうえで、英語の能力はもちろん重要ですが、語学はコミュニケーションのツールにすぎず、製品や業務に対する「熱意」や「専門知識」を持つことがさらに重要だということを感じました。将来、自分が熱意をもって取り組めることは何か、自分に足りないものは何かを考えることの重要性を実感しました。

インターンシップ期間中、現地で働く方々から、海外で働くことのやりがいや責任、そして日常生活のお話まで聞くことができ、海外での仕事・生活について具体的に知ることができました。この経験から将来に向けて、自分の課題も認識できたので、残りの学生生活を充実させ、

事についてだけでなく、人生の先輩としても沢山のことを教えていただき、素敵な方々と出会えたことに本当に嬉しく思います。

最後に、このような大変貴重な機会を与えてくださった科瑪化粧品(蘇州)有限公司の皆様、同窓会の皆様、関係者の皆様にご心より感謝申し上げます。この度の経験と素敵な方々との出会いが近い将来または遠い将来に繋がることを信じ、日々精進いたします。本当にありがとうございます。

2つの国でのインターンシップを通して
— シークス株式会社にて —

森岡裕登

私は、シークスシンガポール、シークスエレクトロニクスインドネシアでの2週間のインターンシップに参加させていただきました。シークス株式会社は、部材調達から、輸出入物流、EMS(電子機器製造受託サービス)まで幅広く手掛けており、海外に多くの営業拠点・製造拠点をもちグローバルな企業です。

私が海外インターンシップに参加した目的は、「海外で働くこと」とは、どういうことなのか、また、日本企業が世界とどのように関わっているのかを自分の目で確かめることでした。将来、海外で働きたいという思いはあったもの

成長しなければならぬと感じました。

参加を検討されている皆様には、ぜひ応募していただきたいと思えます。学生のうちに、海外の仕事の現場を肌で感じ、現地で働かれている方々のお話を直接聞くことのできる機会は他にはありません。自分の将来を考えるうえで大変貴重な経験になると思えます。

最後になりましたが、このような貴重な機会を与えてくださったシークス株式会社の皆様、同窓会の皆様、同志社大学経済学部の皆様から感謝申し上げます。本当にありがとうございます。



第16回 同経会 卒業生のつどい —東京— 2017.11.06

文・同経会執行理事、東京プロジェクト副委員長
高橋 健治 (昭和44年卒)

第16回「同経会東京のつどい」が2017年11月6日(月)、東京・千代田区の日本プレスセンター110階で開催され、約80名の方が参加されました。第一部は講演会で、保阪正康氏(ノンフィクション作家・評論家、日本近現代史研究者)より「昭和・平成そして新時代へー日本社会はどう変わるかー」と題して講演していただきました。保阪正康氏は、1963年同志社大学文学部社会学科卒、「昭和史を語り継ぐ会」主宰。昭和史の実証的研究のため、延べ4000人の人々に聞き書き取材を行い、独自の執筆活動を続けておられます。2004年、個人誌『昭和史講座』の刊行で第52回菊池寛賞を受賞。近著に『田中角栄と安倍晋三 昭和史でわかる「劣化日本」の正体』(朝日新書2017)など、著書は多数あり、ご活躍中です。

ご講演の要旨は、以下の通りです。昭和は62年と2週間。そして平成は今回の特例法により、ほぼ30年で終わることが予想されている。昭和のキーワードは、「天皇」「戦争」「国民」。この三つのキーワードは二面性を持つ。天皇：戦前は神格化した存在。戦後は人間天皇、象徴天皇。戦争：戦前は軍事主導体制、戦後は非軍事体制。国民：戦前は臣民、戦後は市民(シビリアン)。昭和後期と平成は「戦後」を形作ってきた。平成のキーワードは「天皇」「政治」「災



ノンフィクション作家・保阪正康氏

害」となる。さて日本社会は新しい元号のもとでどのような道を歩むのか。そのキーワードは「天皇」「文明」「人間」ではないか。そして、江戸時代の知恵や理念をもう一度見直す必要がある、というお話で、ご講演は、感銘を受けた人が多かったようです。

第二部の懇親会では、最初に、同経会を代表し、小平真滋郎同経会専務理事(昭和55年卒)が開会の挨拶をされました。来賓の児玉正之同志社東京校友会会長は、今年は東京校友会の創立120周年に当たり、関東出身の就学生に対する給付型奨学金をスタートしたこと、2025年の同志社創立150周年に向けて、皆様の一層のご寄付をよろしくとお話しされ、乾杯のご発声をしていただきました。その後、楽しく歓談し、9時頃に恒例のカレッジソング、同志社チアーでお開きとなりました。

卒業生からの便り

前向きに考え、学び続ける



国際化工株式会社
神末宗和 (竹廣良司ゼミ)

私は、奈良県にあるメラミンウエアメーカー、国際化工に勤務しています。一昨年、社長を拝命し、日本のものづくり企業の生き残りをかけて、社員と共に日々奮闘しています。

将来は経営者になりたいと思ひ、卒業後、様々な企業を見ることができ、ITコンサルタン卜会社に就職しました。最初の仕事は、一年間、英語版システムを日本語に翻訳する地道な作業で、思い描いていた仕事と違うと葛藤もありました。しかし上司から、自分の成長に繋がる良



い機会になると助言を受けたことで、前向きな考えに変わり、仕事に邁進し、TOEICにも挑戦しました。今の会社に入社後は、グローバルな調達が当たり前の時代となり、海外とのやりとりも増え、当時の経験が役立っています。このことから、人生における出来事を良い結果に導くためには、前向きな考え方が必要だと感じています。

社会に出て十七年経過し、新卒生生の皆様に特にお伝えしたいのは、社会人になっても学び続ける大切さです。中国の歴史書史記の一節に「これを毫釐(ごうり)に失すれば、差(たが)うに千里を以てす」という言葉があります。最初は小さな違いでも、最後には大きな差になる。大きな誤りも僅かなことが原因で起きるという意味ですが、一日1ミリの变化でも、一年で36.5センチ、十年で3メートル65センチの差になります。また、少子高齢化、情報化、グローバル化が急激に進展する時代で生き残るには、時代の変化に合わせて自分自身を常に変化させることも必要で、日々の努力の積み重ねが私達の未来を変えていきます。皆様が日々、学びを得て、一日1ミリでも変化と成長に繋げ

ることで、十年後、社会に大きく貢献されることを心よりお祈り致します。

人生いろいろ



社会福祉法人 甲山福祉センター

齋藤 栄二

私は1998年4月に45歳で経済学研究科応用経済学専攻に入学しました。演習は大来洋一先生にご教授いただきました。当時、私は出版社に在職しながら、週に2日ほどは学生として今出川キャンパスに足を運んでいました。当時の日本は、絶対潰れないと言われていた銀行がいつも簡単に潰れたり、リストラや倒産などで放出された、いわゆる完全失業者が300万人を超えるなど、戦後最悪の雇用状況でした。本屋さんの店頭では「流動化の時代」など日本経済の変容に特化したタイトル書が多く並んで





いたことを記憶しています。そういう社会情勢の中で、私の人生に大きく影響を与えたのは、出版社の仕事を通して素晴らしい人との出会いがたくさんあったことです。その人との出会いのおかげで、22年間勤めた出版社を離れて大学人に、そして15年間勤めた大学から社会福祉法人への転職につながりました。いわゆる流動化時代のなかのキャリアチェンジです。そんな訳で現在、私は社会福祉法人山福社センター法人事務局でキャリアコンサルタントの資格を活かして人事の仕事をしています。

私が好きな言葉の中に「啐啄同時」があります。人間関係において相互の啐啄が間的に間髪入れずに意気投合しておればうまくいくという禅の言葉です。以前勤めていた出版社の玄関に掲げてあった言葉であり、大学の卒業式に学長が卒業生への祝辞の中で引用された言葉でもあります。そしてもう1つは同志社大学大学院に入学し、目にした創立者新島襄先生の「良心を手腕に運用せよ」という言葉です。私がこれまで信じて実行してきた、まさに人生を集大成する言葉です。

私から卒業生のみなさんに申し上げたいことは、何事も自分を信じて実行して下さい。たとえ迷っても前へ進むことで、何かが見えてきます。恐れずに邁進してください。

さっていることです。その存在が大きな励みになり再び歩む原動力になっています。

これからも何度も転ぶと思いますが、その都度、三つのことを大切にさらに新たな学びを得ることを楽しみにしてこれからも歩んでいきます。最後に改めて皆様の卒業と新たな門出を祝してともに歩みましょう。それぞれの歩みが周りの人の喜びとなり皆様の幸せと同志社の誇りとなることを祈って。

ともに歩みましょう

特別養護老人ホーム オーク
櫻井彰人(島一郎セミ)



ご卒業、新たな門出おめでとうございます。執筆依頼を受けた際に戸惑いと喜びの気持ちになりました。私は地位名誉何もなくむしろ転んばかりの人生だからです。

金融機関で三年間勤めその後家業に入り、紆余曲折を経て現在特別養護老人ホームで働いています。

その過程で学んだことをお伝えできればと思います。私は三つのことを大切にしています。

一つ目は、自他の笑顔。

自分さえよければでもむなしく、自分のことを後回しにして周りのためだけに行動することも苦しくなることを感じています。自分も周りも笑顔になれることがいろいろなことで長続きするんだと学びました。

二つ目は、人の役に立つこと。

一つ目のことにも重なりますが、自分の取り組んだことが自分の為だけでなく周りの人の喜び、役に立つことに繋がることが、ますます仕事やいろいろなことに打ち込む原動力になります。

三つ目は、真剣に生きること。



どんな立場や境遇であれ、その場で与えられたことを真剣に打ち込むことが、自分の心の満足となり、いろいろな縁や道を開いていくきっかけに繋がっていくことです。

私は何度か自分を見失いました。その際にもがき、投げだしそうになりました。その際にも方の見守りや応援のお蔭で立ち直り今に至ります。思い返してみると、転んで、ぶきつちよでも常に真剣にもがいていました。そんな私を陰ひなたで見ていてくださる方が多数いてくだ

「卒業生のつどい - 京都 -」 開催します

関西に在住予定の
卒業生の皆様へ

同経会では、京都、東京、大阪にて、会の発展と同窓生の親睦を目的に、毎年「卒業生のつどい」を開催しています。今回の京都での卒業生のつどいは、外部講師を招く講演会や、同志社グリークラブの公演があり、盛りだくさんの内容となっています。若い卒業生の方々のご参加、大歓迎です。心よりお待ちしております。

開催日時： 2018年6月2日【土】 15:30 受付開始

開催場所： 京都ブライトンホテル

会費： 9,000円

内容： 16:00～ 同経会総会
16:30～16:40 休憩
16:40～17:40 講演 佛教大学歴史学部教授 八木透先生
演題 『祇園祭と京の盆行事』
17:40～18:00 公演 同志社大学 グリークラブ
18:20～ 懇親会開宴

お申込、連絡先：同経会事務局まで ☎ 075-251-3524





同経会賞受賞者 からの便り



常に考え、問いを立てる

三菱電機株式会社

上野兼司（谷村智輝ゼミ）



様々な活動に取り組み充実した学生生活を送った結果、同経会賞を受賞でき、大変光栄に思っております。今回は、大学卒業後から今日までの近況報告をいたします。

私は、2017年4月からメーカーの営業職として配属されました。担当製品は、電気設備の安全に貢献する、配電制御機器でございます。変圧器や遮断器等、一見馴染みのない製品ですが、私たちの生活を裏で支える、重要な機器であります。入社前は見ることもさえないかった配電盤ですが、最近では、気付いたら建屋の電気設備を見ている自分がございます。

営業スタイルについては、販売代理店と協力

しながらお客様に機器提案するというものです。市況は常に変化するため、「なぜ受注が増えたか？」や「いつまで市場の縮小傾向が続くそうか？」のように問いを立て、変化の要因や今後の流れについて考えることが必要不可欠となります。販売実績の数字だけでなく、販売代理店や顧客の声も頼りにしながら仮説を立て、今後の需要動向を予測することで、過剰生産や供給不足を防ぎます。

問いを立て考えることは、同志社大学で学んだことであり、今の仕事に生きていると強く感じております。今後も一層業務に邁進し、経済について理解を深めていきます。

自ら学ぶ姿勢を大切に

滋賀県信用保証協会

野崎勇人（小林千春ゼミ）



学業に力を注いできた私にとって、同経会賞を頂けたことは大変光栄であり、自分が頑張ってきた証として心に刻むことが出来ました。学業をサポートして下さった先生方、友人達のおかげで受賞できたのだと感じています。

私は学生時代、学業だけでなくアルバイトやサークル活動にも力を入れ、その中で自ら学ぶ

事務に対する姿勢

農林中央金庫

松村亮汰（徳岡一幸ゼミ）



昨年、同経会賞をいただき大変光栄に思います。熱心に指導してくださった先生方をはじめ、お世話になった多くの方々に感謝申しあげます。

私は農協、漁協、森組等、農林水産業者の協同組織を基盤とする金融機関である農林中央金庫に勤務しています。現在は前橋支店窓口業務班に所属し、来店されたお客様の入出金や振込にかかる事務処理のほか、為替業務を担当しています。また、就職してからゴルフを始め、ある程度のレベルまでいけるよう練習中です。

同志社大学で過ごした4年間

株式会社村田製作所

米田汐里（小林千春ゼミ）



卒業してから1年が経ちました。今振り返ってみても、同志社大学での充実した4年間は、私にとって大切な思い出となっております。

特に力を注いだゼミ活動では、デイベート大会やビジネスプランコンテストに参加し、貴重な経験をすることができました。初めての経験で戸惑うこともありましたが、小林先生ご指導のもと、仲間と共に乗り越えることができたのは大きな自信につながったと実感しています。また卒業時には同経会賞をいただくことができ、驚くと共に大変光栄に思いました。

姿勢を大切にしていました。勉強以外でも、常識や礼儀であったり、人間関係を良好に保つコミュニケーションであったり、様々な学びを得ることが出来ます。社会人になって、仕事上必要な知識、対人関係において持つておくべき知識等の多さから、自ら学ぼうとする姿勢が、学生時代以上に大切になったと感じました。

また、他府県に転勤や出張のない仕事をしていることもあり、息抜きに日本国内の色々な場所を旅行することが趣味になりました。こうした息抜きの大切さも、社会人になって実感しています。

日々学ぶ姿勢を大切にしながら、時には息抜きをささみ、これからも仕事に精進していこうと思います。





そして現在は電子部品メーカーに勤めています。海外との関わりが多く、また日々新たな商品知識を習得することができるのはとても良い刺激となっています。同志社大学で得た経験を活かし、今後も日々精進いたします。

最後になりましたが、大学生活を支えてくださった同経会の皆様、経済学部の皆様、お世話になった皆様には心より感謝しております。本当にありがとうございます。



同経会賞を受賞して
大阪府公務員
若島大志（和田喜彦ゼミ）

私が同経会賞を受賞することができたのは、ひとえに環境に恵まれたおかげであると思っています。

私がしたことといえば、「真面目に大学に通って勉強する」ただこれだけです。それは学生にとっては当たり前で、学生がしなければなりません。しかし、同時に、それは私にとってほしいことでもありました。

大学に行けば興味深い話が聞ける。仲の良い友達に会える。ゼミの教授は質問に行けば、私一人のために何時間も一緒に考えてくれる。当たり前しなければならぬことをした



いと思える環境が同志社大学にはありました。そして、今回、特段勉強やスポーツができるわけではなく、努力することだけが取り柄の私にとって、日々の頑張りを認めてもらえたことは、非常に励みになりました。

これからは社会人として当たり前の、日々の仕事を頑張ることを通して、社会の役に立てればと思います。それは私にとってしなければならぬことであると同時に、したいことでもあります。

初の大学スポーツ新聞を創刊する

新聞というものを私が最初に作ったのは小学校を卒業したときです。一緒に卒業したクラスメイトの会の新聞でした。それから同志社中学・高校でいくつもの新聞に関わりました。学校新聞、クラス新聞などです。

極め付きは、同志社大学に入ってから「同志社スポーツ」という新聞を創刊したことです。バレーボール部に所属した私は体育会本部員になるのですが、大学2年のとき、1954年に体育会が新聞を発行することを提案しました。今はあちこちの大学が学生スポーツ新聞を発行していますが、そのような新聞はそのころどこにもありませんでした。日本最初の学生スポーツ新聞だと思っています。

タプロイド判で、年に4、5回発行しました。各運動部の戦績、OB訪問などを載せ、野球の同立戦の翌朝に、記事のはいった同志社スポーツを校門で配るといったこともやりました。巨人軍が同志社の野球部員一人を引き抜いたときには、それを批判する体育会委員長の論説を掲載したものです。

この新聞は数年間は発行されたと思

訃報

同志社大学名誉教授、野間俊威先生が、1月16日、87歳で永眠されました。なお、通夜・告別式はご家族のみで執り行われました。ご冥福をお祈りいたします。

訃報

同経会理事、秋山寛氏（昭和42年卒、元ジーエス・ユアサコーポレーション会長）が平成29年12月12日、肺炎のため74歳で死去されました。

本葬は平成30年1月26日午後1時より京都市左京区、顕本法華宗総本山妙満寺内の正行院で行われました。ご冥福をお祈りいたします。

ます。バックナンバーを大学図書館にお渡しして保管してもらっています。

当時は、今と違って、学生自治の考え方が非常に強く、学友会という学生自治組織が体育会の予算も決定していました。しかも、学友会を支配していたのは、一定の政治思想をもつ学生自治会の多数派です。そこで、私が体育会本部員になる前から、体育会は自治会選挙に候補者を立てて選挙運動をやっていたのですが、私が三年の時に体育会系が多数派になりました。体育会の予算はこの年、大幅に増額になりました。

私は経済学部自治委員長になりました。東京で開かれた全学連大会には同志社代表団の責任者として参加しました。学内の全学学生大会で議長団に加わる、といったこともありました。学生運動が盛んだったころですから、かなりの苦勞をしました。私は、右とか左とか、特段の思想を主張したり擁護したりする立場ではありませんが、その後の社会生活振り返ってみて、学生運動にもまれた経験は意味があったと思います。

同経会報 第81号 発刊記念 特別インタビュー



同経会顧問
秋山 哲さん
(昭和32年卒)

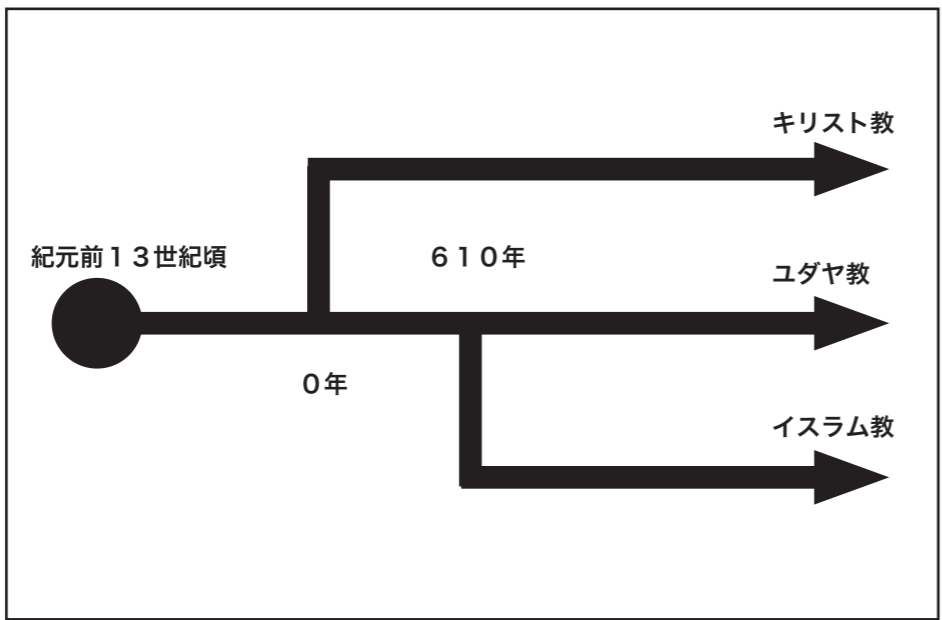
毎日新聞社に入社、激動する世界を取材

大学を出て毎日新聞社に入社しました。小さいころから新聞漬けみたいなものでしたから、記者になること以外は念頭にありません。マスコミしか受けませんでした。もし毎日が採ってくれなかったら、どうなっていたのか。のんきといえはのんきなことでした。

最初の任地は京都支局で、ひとかどの事件記者のように働いていました。したがって、経済部への転勤を命じられたとき、断固お断り、とごねたのですが「お前、経済学部を出ているじゃないか」という支局長の一言で、やむを得ず大阪の経済部に移ります。結果的にはこれが幸運でした。大阪と東京で重要な持ち場が与えられました。大阪では、当時なお主要な産業であった紡績業界を担当し、東京では、通産省（現在の経済産業省）、大蔵省（現在の財務省）、日銀、経団連などが持ち場でした。

ちょっと面白いのは、同志社高校の同級生が私を含めて四人、新聞記者、それも経済記者になったことです。毎日の私、朝日、産経、京都です。朝日君とは日銀の記者クラブで一緒でした。産経君、京都君とは大阪の紡績記者クラブで競争相手、ということになりました。

大きな節目は、1973年にジャカルタ特派員になったことです。もう皆さん忘れておられ



スラム人口を持つインドネシアで特派員を経験し、中東取材もしていますから、イスラムに関してもそれなりの知識があります。クルアーン（コーラン）も読んでいます。

このように、キリスト教、ユダヤ教、イスラムと関わってきたという経歴を持つ人はあまり多くはないのではないかと感じています。

るが、田中角栄首相がジャカルタを訪問して大規模な反日暴動が起こります。私がいいた3年間に、東南アジアではこのような大きな事件、出来事がいくつも起こりました。特派員冥利につきる、といつてよいほどでした。

帰国して、東京経済部のデスクとか編集委員になりますが、1979年夏には毎日新聞社社長が率いる取材団が中国へ行くことになり、私もメンバーに選ばれました。中国が鄧小平による「改革開放」を始めたばかりのときです。副首相に面談したり、各地でまだよちよち歩きだった企業の取材をしたのです。

中国から帰って、この年の末、中東への取材チームのキャップになります。年初にイランでホメイニ革命が起こり、中東激動が始まったからです。多くの特派員と一緒に、中東・イスラム圏を取材して、翌年（1980年）正月、「イスラムの挑戦」という大きな連載企画を始めました。

私がジャカルタに行った73年は、石油ショックの年です。それを追ってホメイニ革命が起こった結果、イスラムが世界を動かす勢力として台頭したのです。それまでの世界は、自由主義圏と社会主義圏の二大勢力のせめぎ合いでしたが、イスラムが割り込んできて、二大勢力との間で摩擦、紛争が起きる、という時代に入りました。私どもの「イスラムの挑戦」連載

この三つの宗教は一神教です。現在世界の注目を集めています。世界混乱の根底にあるのがこれら一神教である、と考える人がたくさんいます。

日本共生科学会という学会が、「宗教と共生」というシンポジウムを開きました。2014年のことでした。このシンポの一つの論点は「一神教であるがゆえに共生できない」ということでした。いきさつは別にして、私はユダヤ教の見解を述べるためにこのシンポに加わりました。そこで私は、共生できない、という論を否定しました。それ以来、私は三つの一神教に関する講演活動を行っています。

最大の問題は、三つの一神教の間の、長い長い歴史的な相互無知です。西欧の指導者たちはクルアーンを読んでいるのでしょうか。イスラム教徒は新旧約聖書を読んでいるのでしょうか。知らないままにヘイトしている、その反作用でテロが起こる。この悪循環を解消しなければなりません。これは、三つの宗教に関係を持つてきたジャーナリストとしての責務ではないか、と感じます。

三つの宗教は同じ一人の神様を信じているのです。相互に相違があるとしても、神は同じ一人なのですから、最終的に神が解決されると考えることはできないのでしょうか。

同志社の神学部は一神教研究センターという

はまさにその動きをとらえたもので、自画自賛ではありませんが、時代認識のしっかりした企画であったと今も思っています。

最近読んだものによると、前防衛大学校長の五百旗頭真（いおきべ・まこと）さんは、「1979年にユーラシア大陸の両側で大きな事件が起こった。西のホメイニ革命と東の鄧小平による改革開放である。これが今日の激動をもたらす二大要因」という趣旨のことを書いておられます。私は、まさにその時期に、この二大要因の現場を取材するという幸運に恵まれたのです。

関係がないのかもしれませんが、『クラシック音楽とは何か』（岡田暁生著）という本を読んでいると「1970年から90年は巨大な文化史的転換期」といったことが書いてあります。そういう大きな時代変化の時期だったのでしよう。

一神教理解を広める仕事をはじめ

ちょっと本筋からずれるかもしれませんが、最近の私の活動のお話をします。

私はキリスト教徒です。長年教会に通い、毎日退職後に洗礼を受けています。また、日本イスラエル親善協会という公益社団法人の役員を20年間務め、会長もやりました。イスラエルはユダヤ教の世界です。さらに、世界最大のイ

ものを持っています。世界的に珍しい研究機関です。どのような活動をしておられるか、十分には知りませんが、同志社が一神教の相互理解を進展させていただければよいが、と思っています。私のやっていることは「ごまめの歯ざり」にしかすぎませんから。

毎日を退職して大学教員の道へ

話をもとに戻しましょう。毎日では、大阪経済部長、大阪編集局長を務め、東京へ戻って経営企画室長から役員になり、出版担当、広告担当などをやり、常務東京本社代表で終わりました。

その後、大学教員になります。本務校は別にありましたが、同志社大学経済学部の非常勤講師も7年やりました。担当したのは「情報経済」という講義です。経済の情報化が進展してきた時期で、情報化によって経済はどう変わるか、ということが一つの学問として認識されていました。

同志社では私の講義に毎年千人前後の学生が登録しました。講義に出るのは百人、二百人でしょうが、試験は千人が受けます。同志社の学生にはしっかりと書いた文章を書いてもらいたいという思いから、論述式のテストをやり続けましたが、びっしりと書いて来る千人の答案を読むには十日はかかります。カンニングがあつたり、

いろいろでしたが、母校の学生を相手にするのは楽しいことでした。

この間に、博士論文を書きました。大学教員をやるからには研究者としての業績らしいものを残したいと思ったのです。「文字メディア産業論」という論文で、経済学部を受け入れていただきました。

同経会会長としてやってきたこと

毎日在職中から同経会副会長になっていましたが、当時の経済学部長、八田英二先生が同経会に対して寄付講座をやってほしいと依頼してこられました。川北南夫会長らと相談して始めたのが「日本経済と私の経営論」というものです。経済界の相当な大物ばかりにお願いして講義してもらいました。講師の選定、依頼には経済記者であった私の人脈をフルに活用しました。

毎週金曜、会場のM21教室はほとんど満員でした。大成功でした。1997年から6年間続くことになりました。

実は、それまでの同経会はあまり活動していませんでした。成績優秀者を表彰する同経会賞がほとんど唯一の事業でした。寄付講座と同時に、学生の工場見学とか、基礎ゼミへのOB講師派遣とか、いろいろな取り組みが始まりました。市民に公開する経済セミナーも実施しまし

た。

その中で力を入れたのが海外インターンシップです。初めは学生の申込が少なくてやきもきしたのですが、継続しているうちに、学生の認知も広まって、すっかりした事業になったのは嬉しい限りです。

いま思っているのは、同経会の活動を若い人たち、はっきり言えば、平成になってからの卒業生が活動の中心になってもらいたいということです。すっかり時代は変わっています。昭和は過去の時代だと思わなければなりません。

新島先生に学ぶ

昭和は過去の時代と言いましたが、しかし我々は明治の人、新島先生を忘れることはできません。最近、同志社の人たちが「新島」と呼び捨てにするのは気に入らない。あくまで「新島先生」です。

中学から10年間、同志社に学びましたから、新島先生についてそれなりの勉強をしてきました。先生は書物を書いていませんから、勉強するには『新島襄書簡集』によるほかありません。中学以来、私にとっては岩波文庫の『新島襄書簡集』（旧版）は座右の書のようなものでした。書簡を読んで分かることは、新島先生は、NHKの「八重の桜」に登場したような軟弱な人ではなかった、ということでした。

体育会にいたせいもあるのかもしれませんが、私が一番好きな新島先生の文章は「男児再戦してやむ勿れ（なかれ）、三戦してやむ勿れ、刀折れ矢尽きてやむ勿れ、骨くだけ血尽きてやむべきのみ」です。「刀が折れ矢が尽きてやめるな、骨がくだけ血が尽きるまで戦え」というのは猪突猛進のすすめ、玉碎主義のように聞こえるのですが、そうではないようです。この文章に続いて先生が書いているのは「真理のために擲つ（なげうつ）にあらずんば、吾人の命もまた無用ならずや」です。命がけで真理探究をやれ、二度や三度失敗したぐらいでくじけるな、ということでしょう。

同じ趣旨の先生の和歌もあります。「いしかねも透れ（とおれ）かしてとひと筋に射る矢にこもる大丈夫（ますらお）の意地」です。

新島先生の激しい気迫、迫力です。何事によらず、全力を傾けて取り組む。挫折があっても、障害があっても、それを乗り越えて目的を達する。

「良心」は大切です。しかし良心にこの気迫が伴わなければなりません。「大丈夫の意地」がなければ石は射抜けません。「気迫なき良心」は折れます。同志社は新島先生のこの覚悟によって出来上がった学校ではありませんか。同志社の人たちに欠けているのはこの気迫ではないかと、振り返ってみて思います。

こういうことを考えていて、同志社の卒業生の中で、私が尊敬する人は二人あります。

一人は、群馬県の安中教会牧師、柏木義円です。彼は新島先生の葬儀で祈祷を担当した人で

すが、牧師をしながら「上毛教界月報」という一種のミニコミ誌を38年間発行し続けたのです。この月報で彼が展開したのは「非戦論」、つまり日露戦争に対する反対論です。何度も発行禁止を命じられますが、くじけることはなかったのです。私のマスコミ志望に大きな影響を与えた人です。

もう一人は、留岡幸助です。明治の末に家庭学校というものを設立します。当時でいえば感化院です。非行歴などのある少年を預かり教育する施設で、東京と北海道にできました。現在も、雪深い北海道遠軽町に北海道家庭学校が社会福祉法人として存在しますが、創設当初からこの施設には塀も格子もないのが特徴です。広い農場の中に、子供たちを収容する家が点々とあって、夫婦の教官が子供たちと一緒に住んでいます。家庭的な環境で子供たちを教育し、立ち直らせるという考え方です。



良心は大切。しかし「気迫なき良心」は折れてしまうと語る秋山さん

岡の理想は今も維持され、職員の人たちは留岡の夢を追いつけています。

柏木、留岡のような良心と、何事にもくじけることのない気迫、これが肝心です。

秋山哲（あきやま てつ）

昭和9年京都市生まれ。昭和32年同志社大学経済学部卒。同年毎日新聞社入社。大阪経済部、東京経済部記者を経て、ジャカルタ特派員、大阪経済部長、大阪編集局長から経営企画室室長。平成3年取締役就任、出版局長。平成6年常務取締役就任、広告担当、東京本社代表。平成10年、奈良産業大学経済学部教授、同志社大学経済学部講師。同年日本イヌラエル親善協会理事。その後、副会長、会長（平成28年退任）。平成15年博士（経済学）。平成16年同経会会長（平成21年退任）。平成19年燦ホーリングス監査役（平成27年退任）。著書『情報経済新論』（ミネルヴァ書房）『本と新聞の情報革命』（ミネルヴァ書房）。

退任の先生からのご挨拶 ①

Geschichte ist machbar!

川越 修

私はここ10年ほど、直訳すると「歴史は作ることが出来る」という意味になるこの言葉を、ゼミの卒業生たちに贈り続けてきました。このフレーズに託したのは、これからの歴史を作るのはあなたたちであり、その意味であなたたちは後世の人々に責任を負っているというメッセージでした。ただ、伝えたかったのは、だからといって肩肘張って生きていけないことではなく、一人一人がみずからの「良心」に従って思い切り羽ばたいて描く生の軌跡が集まって歴史が作られていくということでした。

私は1980年に同志社大学に職を得、翌々年から西洋経済史や比較社会経済史といった経済史系の科目を担当してきました。こうした授業や私の研究テーマと関連付けると、この言葉はもう一つ別の意味を持つこととなります。イギリスの歴史家・国際政治学者であるH・P・カーの言葉を借りると、歴史というのは現代に生きる私たちが、そこで感じたり考えたりしたことにもとづいて過去の時代との間に交わす

「対話」の所産であり、その意味で歴史は時代とともに書き換えられる（＝作られる）と言えるのです。具体的には、史料をもとに新たな事実が発掘されたり、これまで確定されてきた「事実」の重要度が見直されたり、さらには取捨選択された「事実」相互の意味連関（＝解釈）が読み替えられたりすることによって、歴史は書き換えられていきます。

私と同志社大学とのつながりは、今年の3月で終わりを迎えます。ただ私は、私が同志社で過ごした38年間から得たものをもとに、この先残された日々をみずからの「良心」に従って律すること、少々大げさに言えば歴史に参画し続けたいと思っています。それはゼミ生たちに贈った言葉をみずからも引き受けると言うことに他なりません。また、職業としての制約から離れ、微力ながら歴史との自由な「対話」も続けていきたいと願っています。

退職するにあたって、再出発への思いをこうした形で綴ることが出来るのは、この間、同僚の教職員の皆さんが私の教育や研究をサポートしてくださったお陰であり、教室の内外での学生や大学院生、さらにはゼミ生との「対話」(往々

退任の先生からのご挨拶 ②

同経会の思い出

清川 義友



同志社大学経済学部を卒業した後、そのまま同大学院経済学研究科に進学した私は、経済学部の卒業生により構成される同経会の名前はもろろん知っていたものの、当初は深く関係することはあまりなかった。しかしその後、同志社大学経済学部に教員として奉職するようになり、事情は次第に変わってきた。

とくにそれまでと大きく異なる経験をしたのは、私が経済学部長になり、同経会寄付講座に講師としてお越しになられた日本有数の一流企

業のトップの方々と、直接お話しできる機会を与えられたときである。当時の同経会長は川北南夫氏であり、またそのあと会長を継がれた秋山哲氏とともに、授業の担当をされていた小林千春先生と講師の方々の打ち合わせに、同席させていただくことができた。

その頃のテーマとしては「日本経済と私の経営論」「京都経済」などがとりあげられ大学教員の理論的な話とはまた異なる、経済活動に直接深くかかわり企業を導いてこられた方々の、なんとも言えない独特の重みに圧倒されたことを記憶している。

そして部長職を退任したあと、今度は同経会から発行される「同経会報」に広報委員長として参加させて頂き、同経会の活動を広報される編集委員の方々のご苦勞を目的の当りにした。編集委員の方々は、同経会の役員の方々ばかりで、各方面で活躍されご多忙な中を、自分の時間を削って会報の編集をボランティアで担当されていた。大変打ち解けた楽しい雰囲気の中で会報の内容が決まってきたいき、会報が出来上がる様子に接することができたのは、大変楽しい思い出である。

にしてモノローグになっていましたが…)の喜びがあったからに他なりません。皆さん、長い間ありがとうございました。



ところで、経済学部に対する受験生の関心は最近どうだろうか。私の思うところでは、これはその時々々の経済状況が深くかかわっている。安倍政権になってから日本経済が回復基調であるのは、もちろんプラスに作用しているが、世界のあちこちに見られる地政学リスクなど、全体として先行き不透明感もかなり強い。その辺をどう判断するかが、経済学部の人気にも反映されるように考えられる。

経済学は自然科学とちがいで、対象の経済そのものが、生きて変化を続けている。これをどう理解しどう分析していくか、そこに経済学の独自の面白さがあると思われるが、同志社大学経済学部を卒業された方々が、大学で習得された知識を活かして、各界で大活躍されますことを、心から願ってやみません。



大学と経済学部ひろば

現役の学生が語る「わがゼミ」

東良彰ゼミ

文・井上敬悟

同志社大学経済学部OB・OGの皆様、こんにちは。私は、東ゼミ三年次生の井上敬悟と申します。2017年度のわが三年次演習の特徴ですが、男子5名女子1名と少人数であることから二年次生との距離感も近く、アットホームな雰囲気の中で先生と様々なお話をさせていただいています。

飲み会やゼミ合宿などでは、私たちは先生を人生の先輩として勉強や将来の夢、恋愛に至るまで様々なテーマについて話し、先生もそれに対して親身になって相談に乗ってくださいます。

普段の演習では、先生自身がアメリカで学んでこられた最先端の経済学に触れるとともに、私たち一人一人の関心に基づいたテーマを掘り下げ探求しています。

振り返ってみると今ではこの東ゼミは、私の大学生活に無くてはならないものとなりました。

このゼミを通じて、今後とも経済学への更なる探求とともに、人間的にも大きく成長していきたいと考えています。

船橋恒裕ゼミ

文・熊谷亮汰

私たち船橋ゼミは「福祉経済」を研究対象にしています。年金、医療、介護など福祉に関係することを中心に学んでいますが、福祉のみならず、ゼミ生個人が興味を持った内容を全員で考えるなどして、幅広い範囲に取り組んでいます。

3回生の春学期はディベートを中心に行いました。福祉のほかには外国人労働者や少年犯罪など多岐にわたるテーマで行い、様々な意見を出し合うことで、多角的視点や言葉で伝える難しさなどの新しい発見が多くあり、とても有意義な時間になりました。現在は卒業研究に向け、各々でテーマを決め、中間発表への準備をしています。限られた時間をうまく使い、いいものに仕上げたいと思います。

私たちは教授の船橋先生も学生も自主性を大事にしており、学期が始まるたびにゼミ長を中心に15回の授業計画をゼミ生自身で話し合っており決めています。受動的にゼミに取り組むのではなく、一人一人がゼミの中心人物であるという気持ちを持ち、より良いゼミにしていきたいと思っています。

布留川正博ゼミ

文・鷹田 瑞希



2017年度のゼミでは、現代の労働移動・移民問題やグローバル経済などから各自が興味を持ったことについて研究しています。

今年度はオーストラリアのケアンズを学生プロジェクトで訪問するということで、事前にオーストラリアの興味を持ったことについて学びました。オーストラリア研修では実際にオーストラリアで生活し活躍する日本人の方々にお話を伺い、日本とのライフスタイルや労働条件の違いについて学ぶことができました。また、これから日本人が海外で生活し活躍するためには何が必要かなど、私たちのこれからの大きく関係することを教えていただきました。

今後もオーストラリアでのゼミ研修で学んだことを生かし、現代の労働移動・移民問題やグローバル経済についての知識を深めていけたらと考えています。

川越修ゼミ

文・清田真衣

2017年度の川越ゼミは、グローバル化の進む現代世界においてヨーロッパと日本が直面する共通の諸問題を取り上げ研究しました。また、今年度は私達の学年をもちまして川越先生が退職されるため、私達の学年のみならず卒業生の皆様とともに「川越ゼミ最終ゼミ」という機会を設けました。

今年度は就職活動や卒業論文執筆等、個人で動く機会が多かったのですが、この場を機にゼミ生全員が協力し合うことが増えました。普段はみな自分の意見を言うことが少ない本ゼミですが、話をするたびに様々な価値観に触れ刺激されることが多々あります。卒業まであと僅かですが、川越先生が受け持つ最後の学年として相應しい行動をとり、明るく笑顔で卒業できるよ

うに日々努力して参ります。



河島伸子ゼミ

文・片野亜耶

河島ゼミでは、国内外の様々な文化産業を対象に、それぞれの文化が持つ経済との結び付きを踏まえた研究を行っています。

例年、特定の文化産業に強い関心と知識を持ったゼミ生が多い本ゼミでは、活動を通して、今まで知り得なかった分野に触れる機会を多く持つことができます。特に、2年次から3年次にかけて行う個人の研究発表では、その知識が存分に発揮されており、ゼミ生同士が互いに学び合う場となっています。

3年次からはグループでの研究発表も行っており、2017年度は、スポーツ、アート、ファッション広告、舞台芸術、アニメ、サブカルチャーの計6グループに分かれて研究発表を行ってまいりました。

それぞれのグループが、各文化産業を深く掘り下げ、毎回違う角度からの研究発表を目指しています。

今後も、河島先生の下、各々が得意とする分野だけではなく、新たな分野への造詣も深めていきたいと考えています。



北坂真一ゼミ

文・水島巧



現在、北坂ゼミのゼミ生は僕一人で、マンツーマンで活動しています。

マンツーマンなので、先生の下で真剣に経済学を勉強でき、毎週ゼミの時間には濃密な時間をすごせています。2016年度では毎週「最新日本経済入門」という本をまとめ、それについての先生とのディスカッションを通じて現代の日本経済について理解を深めました。2017年度に入り、現在三年生ではありますが、早めに卒業研究について取り組ませていただき、時間に余裕があるため様々なアプローチで卒業研究に取り組むことができ、非常に充実した研究となっています。

ゼミの分野としては計量経済学であり、数学や統計を基に現代の日本経済について分析を行っています。なかなか難しい分野であり、頭を悩ませることも多いことは事実ですが、先生に気軽に聞くことができるため、きちんと頑張ることができる環境です。

小橋晶ゼミ

文・奥谷将也



私達小橋ゼミはミクロ経済学の理論を用いて様々な社会問題を考察することをテーマとし、日々活動しています。2017年度はそれに加えて、ディベート大会にも出場し3チーム中1チームが本戦に出場する事が出来ました。ディベート大会では日々学んでいる内容を相手に分かりやすく伝える事の難しさを知りました。

また、小橋ゼミの特徴は学生の主体性が重んじられる事です。研究内容や授業の進め方などを学生が中心になって決めるため、上手い出来ないことも多々ありますが、他ではできない貴重な経験を積む事ができています。写真は夏に合宿で和歌山に行った時のものです。海を見に行った時に足を滑らせて私服のまま海に落ちた学生もいました。

黒潮市場やアドベンチャーワールドに行き、思いつき楽しんでゼミ内の絆を深めることができました。今後はますます勉強もゼミ内の交流も励んでまいります。どうぞ宜しくお願い致します。

小林千春ゼミ

文・高倉弘陽



いつもゼミ生に対して熱く、厳しく、そして時には優しく接してくださる小林千春先生の下で、小林ゼミは活動を行っています。経済学部・経済学会主催のビジネスアイデアコンテストには3回生全員で参加しました。毎日各班が集まってアイデアの研鑽に努めた甲斐もあり、書類選考を3チームが通過しました。本戦では優勝できませんでしたが、奨励賞をいただきました。

経済学部・経済学会主催ディベート大会では3回生中心の1チームが優勝を成し遂げ、3連覇を達成しました。ビジネスアイデアコンテストで優勝を逃した悔しさをバネに、ゼミで一丸となって積み重ねた努力が報われ、ゼミ全体が笑顔に包まれました。2016年度からは日刊工業新聞社などが主催するキャンパスベンチャーグループ大阪大会に参加しています。2017年度は2回生中心の1チームが大阪大会最終審査会に残っており、プレゼンテーションの準備をしています。これからは先輩後輩関係なく、ゼミ生一同で目標に向かって切磋琢磨しあえるようなゼミを作り上げるべく尽力していきます。

小藤弘樹ゼミ

文・小川雄暉



我々小藤ゼミは、2年次の秋学期から3年次の秋学期にかけて、数冊の教科書を選択し輪読しています。今年度の2年生は神取道宏著「ミクロ経済学の力」、3年生は高橋孝明著「都市経済学」を輪読しました。また、3年生になると他大学との合同ゼミに向けた準備も始まります。今年度は11月に法政大学経営学部の福島ゼミと行いました。夏休みには調査や論文の執筆を行いました。10月からはプレゼンテーションを作成したり、相手のゼミ生の論文を熟読して疑問点や質問点をまとめたりしました。異学部間で合同ゼミを行うことにより、異なった視点からの意見や専門分野外の知識を得ることができます。この合同ゼミの経験を活かして、4年次には卒業論文を執筆します。

全員で14名の少人数のゼミのため、上級生は下級生のゼミやサブゼミにも積極的かつ自主的に参加しています。経済を深く学ぶのはもちろん、時事問題から恋愛まで幅広い話題で活発に議論しています。

久保徳次郎ゼミ

文・横尾吉徳



2017年度の久保ゼミでは、春学期は主に円相場を用いて金融商品、金融市場の仕組みについて学びました。実際に自分たちで円相場を操作することで、より深く理解できました。秋学期は、久保先生による講義が主に行われています。これによって、春学期に曖昧だった分野に関してもしっかりと理解することができたと思います。また、秋学期にはゼミ生数人による発表も行なわれました。その場での先生からの指摘は、私たちの未熟さを感じさせ、さらなる学習への意欲を駆り立てるものとなりました。

また、毎年参加させていただいているりそな銀行様の金融工学インターンシップにも3名が参加しました。これは、先生のお力だけでなく、ゼミの先輩方の残された功績のおかげだと思います。

最後に、まだまだ未熟な私たちですが、久保先生の指導のもとで全員仲良く、そして向上しあえるように日々頑張っています。今後もゼミ活動を通してさらに成長していきたいと思ひます。

宮本大ゼミ

文・谷口魁



今年度の宮本ゼミは学年の垣根を超えたゼミ活動がさらに増えました。まず、今年新たな活動として行ったのが、秋学期からゼミに参加した2回生と1年間ゼミで学んだ3回生との共同グループワークです。提示されたテーマに対して最善の解決策を提案するという内容で、解決策に至るまでどのように考えていくか、そして資料の作り方などを3回生がリードしながら活動しました。

また12月実施した全学年のゼミ生が参加するキャリアセミナー合宿は卒業後のキャリア構築を考える機会であり、ゼミの恒例行事となりました(写真は今年度の様子)。今年度は大勢の卒業生の方々にも参加いただきました。主に4回生からは就職活動の経験や役立つ情報、どのように就活を行っていくかについて、そして卒業生からは就職したその後について私たち2、3回生にご教示いただきました。宮本ゼミはこのように上の学年が学んだことを下の学年の役に立つようにフィードバックしていくことで縦のつながりを強め、ゼミとして大きく成長しています。



■宮崎耕ゼミ

文・徳本拓海

2017年度の宮崎ゼミは、18期生2名、19期生24名、20期生24名、21期生27名の総勢77名で活動しております。21期生は114名の応募者から選出された個性溢れる超精鋭で、我々20期は少々圧倒されております。

4回生は2万字を課せられた卒業研究と格闘中、3回生はオープンデータ活用したスマートフォン対応ウェブアプリケーションシステムの開発に奮闘中、2回生はウェブサービスの調査・研究とウェブページ制作のハウツーサイト構築に苦闘中です。



夏の合宿では昨年のシリコンバレーに続いて米国シアトルを訪れ、ボーイング、マイクロソフト、アマゾン进行调查しました。また、EVEには「ふわふわパンケーキカフェ」を出店し、伝統のブリクラを「EVE」対応にしたサービスも好評でした。ご多忙のことと存じますが、近くにお越しの際は是非お気軽にお立ち寄りください。先輩方の益々のご活躍をゼミ生一同心からお祈り申し上げます。

■宮澤和俊ゼミ

文・柴垣佑衣

私たちのゼミでは今年度二度、関西学院大学の田畑ゼミと合同ゼミを行いました。ディベート大会と中間報告会が開催され、他大学の学生と直接的に交流できる貴重な経験ができました。ディベート大会のお題は「二つ、「年金方式を賦課方式から積み立て方式に移行するか否か」と「ベシックインカムを取り入れるか否か」。双方とも現在日本が抱える重要な問題です。準備段階で調査を重ねていった時間は、今後私たちにも大きく関わるこれらの問題に真剣に向き合う機会となりました。

中間報告会では、双方のゼミが普段研究している内容を報告し、聞き手側は質疑応答をすることで理解を更に深めます。宮澤ゼミでは「合計特殊出生率」と「大学進学率」についてその要因を回帰分析を用いて調査しています。私たちの研究内容を初めて聞く他大学の学生から客観的な意見を伺える貴重な機会でした。これらの意見を踏まえ、今後の卒業論文の研究などをより良いものにしていきます。



■茂見岳志ゼミ

文・森脇直樹

現在、茂見ゼミでは24名の3回生が在籍しています。茂見ゼミの恒例と言えるのでしょうか、男女比は7対1で男つ気あふれた状態が続いているため、少々暑苦しいです。ゼミ外での交流はとくにありませんが、イベントがある時積極的に参加する程度の中、良さは持ち合わせており、季節の変わり目ごとに開催される飲み会では毎回10名程度が集まります。普段の授業内容は、相変わらずメカニズムデザインについて学習していて、2年前に発行された会報に記載されている内容とさほど差異はないです。タイトルにもある通り、躍進についてなのですが、なんと、星野リゾートが主催するビジネスアイデアコンテストにおいて、茂見ゼミが優勝しました！さらには、同志社大学経済学部が開催するディベート大会において決勝トーナメントに進出するなど、茂見ゼミの躍進が続いています。私たちが手に入れた知識やノウハウを後輩たちに継承しさらなる結果を出すことで、より茂見ゼミが活性化していくことをとて、私も楽しみにしています。



■新関三希代ゼミ

文・榎田彰史

2017年、私たち現役生は新関先生のご指導の下、(1)大阪大学・関西学院大学とのディベート大会(2)日経ストックリーグの2つの活動を行いました。

3大学対抗ディベート大会では「外国人労働者受け入れ拡大は日本経済にとって是非か」、「残業時間の上限規制は日本経済にとって是非か」というテーマでディベートを行い、昨年度に引き続き、今年度も両試合ともに白星を挙げる事ができました。

日経ストックリーグでは、約半年をかけて論文作成を行いました。論文作成に当たり、慶應義塾大学・関西学院大学・聖心女子大学とインターゼミナールを行い、意見交換することで論文にさらなる磨きをかけることができました。また、東京で開催された新関ゼミOB・OG会に参加させていただきました。社会で活躍する沢山の先輩方とお会いすることができ、大変有意義な時間を過ごすことができました。様々な活動を通して、新関先生や先輩方に支えていただき活動できる喜びを感じた1年間でした。偉大な先輩方に少しでも近づけるように、今後もゼミ活動に全力投球していきます。

今後とも応援よろしく申し上げます。



■西村卓ゼミ

文・赤坂るきと



私たち西村卓ゼミ29名の3回生は西村卓教授とTAの和久あさぎさんのもと、毎週金曜日の3時限を中心に活動を行っています。活動テーマは「京都の職人企業における伝統の継承と革新」です。京都は観光客が多く訪れる都市であり、日本文化を多く体験できます。そんな中で京都が多くの人を惹き続けるものとは？それらを明確にする

ことを「職人」という観点から日々学習しています。5つのグループそれぞれが職人企業を取り上げ、フィールドワークという形で調査、研究を進めています。また学習以外のイベントなども多く行っています。4月の花見、9月の夏合宿、10月新入生歓迎会、そして12月のクリスマスパーティーなどイベント盛りだくさんです。このようなイベントを設けることで、横はもちろん縦のゼミ生同士の仲もより一層深めることができましたと自負しています。今後も職人企業の意義を学ぶとともに、21世紀の時代に活躍できる人材となるための知識を身につけていきたいと考えています。

■西岡幹雄ゼミ

文・田中優花

「切磋琢磨の時間」

ゼミの大きな研究テーマは「関西経済の活性化」です。同志社大学のある京都、関西経済の中心大阪、地域資源の宝庫滋賀、そして潜在性にあふれる奈良。身近な地域の研究を通して多角的な視野が養われました。

西岡ゼミの魅力は切磋琢磨できる環境があり、仲間がいるところです。ゼミの時間は活発に議論します。毎回議論に熱中して時間が足りないくらいです。また、ゼミの時間以外にも自主的に集まって研究を進めます。お互いの研究に意見を出し合っってより良いものになるように切磋琢磨しています。

そんな活動が下級生にも伝わって、ゼミ選考にはたくさんさんの2回生が応募してくれました。2回生が加わってから横のつながりだけでなく、縦のつながりができて、2回生とも切磋琢磨しています。また、今年度は2回の交流会があり、研究の成果を発表できました。

このように活発な西岡ゼミでゼミ生とともに今後も精進していきます。



落合仁司ゼミ 文・安西咲人

私たち落合ゼミでは、社会と経済の関係について研究を深めています。

2017年度のゼミ演習では、米国のトランプ大統領やフランス大統領選におけるルペン候補の躍進に代表されるポピュリズムについて焦点を絞って学びました。

2回生は、水島次郎著の『ポピュリズムとは何か』を輪読し、ポピュリズムの基本的な知識を身に付けました。3回生は、ミシェル・ヴィノック著の『フランスの肖像』を輪読し、落合先生の造詣の深いフランスを例にポピュリズムについて考察を深めました。少人数での活動で題材も難解なものでしたが、先生の熱心な解説と指導で私たちの理解はより深まったと思います。

4回生は演習のテーマに関連して自由なテーマで卒業研究に取り組みました。先日行われた発表会では、各人の指向の凝った研究の成果を共有することができました。今後も、ゼミ活動に熱心に取り組んでいきたいと思えます。

小野塚佳光ゼミ 文・木村拓哉

2017年度における小野塚ゼミの活動は春学期と秋学期で2つの異なる内容を実施しました。春学期では小野塚先生が制作している「IPEの果樹園」というサイトを使って世界各国の政治事情や経済事情を学習しました。また全員で書籍を読み込みつつ、グループに分かれて内容の発表を行いました。

夏休み中には金沢へゼミ合宿に行きました。兼六園などへ全員で観光に行ったり、飲み会をしてとても楽しい時間を過ごしました。しかしただ遊んでいたわけではなく、秋学期に活動する題材として「World Peace Game」について話し合を行いました。「World Peace Game」とは架空の世界に存在する国同士が発する諸問題について話し合いを行い、問題を解決に導くというものです。

秋学期では「World Peace Game」の完成を目指して各国が国際問題にどのように対応しているのかをゼミ生同士で話し合っています。



奥田以在ゼミ 文・大仲一輝

私たち奥田ゼミは、京都の伝統産業を支えている老舗や職人さんの研究をしています。活動内容としては、自分たち自身で老舗や職人さんにアポイントメントを取り、実際に私たちが足を運んでお話を伺いし、その業界への理解を深めております。現3年次生は、和紙、和蠟燭、出汁、お酢と各班が自由に研究テーマを選定し、それぞれが切磋琢磨しながら発表に取り組みしております。発表後は、先生から講評をいただき、次の発表がより良いものになるようアドバイスをいただいております。また、奥田ゼミは勉強以外の活動も大変盛んで、懇親会を定期的に開催したり、花見やBBQ（バーベキュー）などゼミ生全員が参加する行事を設けたり、秋には、各学年のゼミ生が一同に集まる縦コンを開催し、先輩後輩、先生との交流を深めております。イブ祭では、ゼミ生全員が協力し、材料全てにこだわったチヂミを提供しました。みんなで作ったものを上げる難しさ、楽しさを実感しました。



佐々木雅幸ゼミ 文・岡航平

私たち佐々木ゼミでは創造都市論について研究しています。簡潔に言うと、都市の文化と人々の創造性に着目を置きながら、新しい都市経済システムや行政の在り方について扱っている理論です。授業では文化政策や創造都市論に関する書籍をグループに分かれて輪読し、疑問点や問題点について議論をすることで理解を深めています。

今年度は日中韓三ヶ国の都市で行われる東アジア文化都市2017に京都市が選ばれたこともあり、過去に選定された横浜市、新潟市、奈良市、京都市と中韓の8都市を対象に研究を進めました。本研究は佐々木教授が事業の委員を務めている縁から、実際に事業に携わっている研究員や市職員の方々に話を聞いたり、二条城で開催された現代アート展に足を運んでみたり、机上論にとどまらない活動を行ってきました。緊迫した国際関係の中、東アジア文化都市が開催されたことで改めて文化・芸術の持つ力を感しました。今後もゼミ生、教授とともに創造都市の可能性を広げていきたいと思えます。



大野隆ゼミ 文・小早歩

大野ゼミでは、主に二つの軸で活動を行っています。一つは政治経済学の学びから現代社会を考察すること、二つ目はそれをもとに論文執筆を行うことです。論文は、2年次〜4年次で合計3本、それぞれ1〜3人の班に分かれて執筆します。

一つの論文執筆にかかる約1年の間、自らの問題意識からテーマを設定し、答えのない問いに向き合い続けるという大変さがあります。しかし、与えられたものではなく自らの考えを論文にする作業は、分析力や論理力を身につける上で必要不可欠であると実感しています。さらに各班の作業にとどまらず、定期的な報告会によって、自らを客観的に見ることも出来ます。そして、研究を通してつまづいたときには、先生が手を差し伸べてくださります。厳しくもあり、優しくもある大野先生のご指導のもと活動する中で、私たちは日々多くのことを学び続けています。今後はこれまでの学びを生かし、卒業論文の執筆に力を注いでいきたいです。



鹿野嘉昭ゼミ 文・渡辺翔

早春の候、OB・OGの先輩方はいかがお過ごしでしょうか。鹿野ゼミ2017年度の活動報告をさせていただきます。演習では、経済学の専門書をさせていただきます。発表します。金融の基本的な概念が述べられた英書や昨今の日本銀行による金融政策を論じた書籍等を通じて、理論的な経済学の知識を得るだけでなく現代日本経済の動向を把握しようと日々精進しています。そして、先生が私たちの身近な経済の話題や最新の新聞記事などを取り上げて講義されるので、ゼミ生は先端的な見識を広められていると感じます。また、ゼミ生の一部は学んだ知識を活かす・挑戦する場として、毎年日銀グループに参加しています。この様に真面目なイメージが強い鹿野ゼミですが、この通り真面目です。しかし、先輩方が就職活動や勉強の相談に乗ってくださるので非常に仲が良く、さらに同回生はゼミ活動を通じて距離が縮まるのでいつも楽しく活動しています。これからも上下の繋がりをもっと大切にしていきたい所存です。末筆ながら、先輩方皆様のご健康とご多幸を心からお祈り申し上げます。



菅一城ゼミ

文・辻未鷹

OB・OGの皆さまへ菅一城ゼミの近況を報告させていただきます。私たち菅ゼミでは各自が自由にテーマを選び、毎回の授業で順番にそのテーマについての研究のプレゼンテーションを行っています。

個人の発表内容についてゼミ生全員で議論を行い、その中で出てくる疑問や新たな気づきをヒントに次の発表、そして卒業論文を組み立てております。このような授業スタイルを続けている中で、私自身プレゼンテーション能力だけでなく、人の話を理解する能力や問題を発見する能力も身に付いているように感じます。また、衣食住に関わるものやスポーツ、音楽、民族問題など各ゼミ生の研究テーマが様々で、普通に学生生活を送っているだけでは耳に入っていないようなユニークな情報がたくさん得られ、非常に勉強になっています。



これからもゼミ生皆で切磋琢磨し合い、楽しく、学びの多いゼミ活動にしたいと思っております。

高井才明ゼミ

文・加藤孔貴

高井ゼミでは情報システムをテーマにIT技術の最新動向を研究しています。

今年度は、あらたに24名の二回生を迎え、総勢60名で活動しています。二回生、三回生ではHTML5、CSS3、JavaScriptを使ったWebページ・Webアプリケーションについて研究しています。四回生は、情報システムに関わるテーマで各自の卒業研究に取り組んでいます。



ゼミ合宿では、今年度はじめて米国シアトルへ行き、ボーイング社、Microsoft社、Amazonのショップ、シアトル州立大学などを視察しました。また、東京のビッグサイトで行われた自動総合認識展にも赴き、RFIDなどの技術や製品について目にしてきました。IT技術を実際に肌で感じることで、有意義な合宿となりました。この場で書ききれないほどにITの生の動向を学ぶことができ、国内に限らず海外にも目を向けられる環境で過ごさせて頂いています。今後も、個性豊かな仲間たちとともに成長していきたいと思っております。

田中靖人ゼミ

文・山下浩輝

私たち田中靖人ゼミは、「学生主体」という方針のもと、日々活動を進めています。自分たちがどのような力を身に付けたいのかを考え、そのためにすべき事を実際に行動に移していく積極的な授業を展開しています。今年度は、経済学部のゼミ紹介に関するフリーペーパーを作成し、『作るからには本物を』をモットーに紹介以外にも、スナック特集、カフェ・ラーメン特集など、読者が楽しめる内容で作成しました。結果1000部以上の発行に成功し、募集人数の約2.5倍の学生に田中ゼミを志望したいと言ってもらえることができ、非常にやりがいを感じることができました。他にも、論文大会WESTの運営・執筆、TOYOTAの人事の方や内定者の方々から講演をしていただくなど、意欲的に活動に取り組んでいます。



学生自らが考え活動するため壁にぶつかることが多いですが、田中先生に見守られながら、先輩方の意見を参考に日々精進しています。これからも良い意味で「自由」に活動を続けていきたいです。

谷村智輝ゼミ

文・坂本あすか

私たち15期生(現3年生)は、前期にテキスト『日本経済の構造変化』の輪読を通してグローバル化の影響を受けた日本経済について理解を深めました。後期には、これまで学んだ内容やそれぞれの問題意識などをテーマに、グループ研究に取り組みました。そうしたなかでフィールドワークに出向いたり、企業の方に直接お話を伺ったり、4年生からアドバイスも頂きました。その結果、充実した研究ができ、研究成果を報告する合同ゼミも素晴らしいものとなりました。また、夏休みにはシンガポールに海外研修に行つて参りました。現地での企業訪問を通して、企業のグローバル化について学ぶ良い機会となりました。



半期に一度のゼミ生がしたいことをするゼミ生の日では、各学年幹事を中心に楽しい企画を考え、仲を深めております。今年度も、ゼミ生同士が互いに切磋琢磨し合いながら充実したゼミ活動を行っていきます。

角井正幸ゼミ

文・加藤孔貴

私たち角井ゼミでは、アメリカ経済について学んでいます。今年の三回生は留学や編入などでセメスター毎に新しい出会いや別れがあり、現在21人で活動しています。そして細かく丁寧な角井先生の指導のもと、日々ゼミ活動をしています。

今年の活動報告として、春学期にはビケティの『21世紀の資本』について学びました。班ごとに担当箇所を分け、その内容についてプレゼンテーションを行うことによって理解を深めました。プレゼンテーションの準備のためのグループワークでは、班ごとに決めた論題を全員で話し合うことにより、自分では思いつかない考えを聞き、また新しい知識を得ることもできました。

秋学期からは卒業論文に取り組んでいます。さらに、就職活動を終えた先輩方から実際に話を聞く機会を頂きました。参考になることをたくさん教えていただき、良い機会になりました。このように角井ゼミではアメリカ経済について深く学ぶことができ、さらに先輩方との交流もあり、ゼミ生同士でも仲良く活動しています。

和田喜彦ゼミ

文・船津優也

私たち和田喜彦ゼミでは「現場主義」を指針として日々活動しています。現地の方々と直接お話を伺うことで、文献・新聞などに反映されない声を知ることができ、自分たちは世界で起こっている事象のほんの一部しか認識していないと痛感させられます。

福島原発事故をきっかけに原発反対運動が盛んになりました。しかし、安倍政権は原発の再稼働を推し進めています。そこで私たちは現場で何が起きているのか知るため、2回の春の合宿で、愛媛県の四国電力伊方原発の現地調査を行いました。四国電力と反対住民の両者からお話を伺いましたが、双方の見解が食い違い、難しい問題だと実感しました。

この経験を通して、一般的に正しいと信じられていることが「本当にそうなのか」と一旦立ち止まって考えるようになりまし。現場に行くことで養えた批判的思考力は、今後大きく役に立ちます。後輩たちに現地に行くことの重要性を伝え続けて参ります。





同経会役員名簿

Table of alumni association members with columns for name, committee, and graduation year.

(2018年2月現在)

Main table of alumni association members with columns for name, committee, and graduation year.

役員外アドバイザー

Table of non-official advisors with columns for name, committee, and graduation year.

八木匡ゼミ

文・重倉健

私たち八木ゼミナールは、毎年開催されるWEST論文発表会に向けて日々、試行錯誤を繰り返しています。



横井和彦ゼミ

文・小池優奈

横井ゼミは1学年に30名近くが在籍している大規模なゼミではありますが先生と学生の距離が近く、自分の意見をとても大切にしてもらえます。



四谷晃一ゼミ

文・中野大樹

私たち四谷ゼミは「教育の経済学」について学んでいます。教育の経済学について書かれた本を読んで、説明できるように理解し、足りないことや補足を自分で調べ、その内容をゼミ内で発表するというスタイルでやっています。



同志社大学経済学部 同経会

〒602-8580 京都市上京区今出川通烏丸東入
TEL：075-251-3524 FAX：075-251-3136
URL：www.dokeikai.com

2018年4月1日 発行
編集：同経会 広報・編集委員会
発行人：同経会会長 服部盛隆
印刷：ライティング株式会社